

# 海外の日本語教育におけるリソースの活用

トムソン木下千尋\*

キーワード: 海外の日本語教育, リソース, シラバス, 学習の自律, ネットワーク

## 要旨

教科書に代表される従来の「教材」は、教室での日本語使用のために作られ、教えるための材料であった。ここで扱うリソースは、実社会での日本語使用のための学習に使い、実際の日本語使用にも役立つ、また、日本語使用の対象となる、つまり学ぶ材料である。「教材」から、リソースへの移行は、学習者の教室からの解放をも意味し、リソースの活用は社会言語学、第二言語習得、教育学の側面からも有意義である。

リソースには「人的リソース」、「物的リソース」、「社会的リソース」の三種類がある(田中・斉藤 1993)といわれるが、新たに「情報サービス・リソース」の項を設け、海外の、とくにシドニーのリソースを四つの角度から検討し、そのリソースを全体シラバスの中、外の両者で活用する方法を紹介し、検討する。リソースは、例えば、シラバスの中では、ゲストスピーカー、ビジター・セッション、家庭訪問などという形で、また、シラバスの外ではプロジェクトの形で活用できる。学習者が自主的にリソースを開発し、自律的に活用し、学習していくには、上記の両者が必要だろう。「教材」からリソースへの移行は、学習者の教室からの解放、自律と共に、教師の役割の再考とも大きく関わっているといえる。

## 1. はじめに

日本語教育に携わっている人々の集まりに行くと、必ずといっていいほど聞かれるのが「お宅はどんな教科書を使っていますか」という質問である。使っている教科書だけでうちのプログラムを評価されるのは嫌だなあと内心思いながら、「初級では〇〇を使っています。中級では…」などと答えている。日本語教育におけるリソースに関しては、さまざまな議論が出ているものの、現場の先生方の関心は、まだまだ従来からの「教材」、例えば、教科書、問題集、カセット・テープ、ビデオ、などに集中しがちなのが現状ではないか。

\* Chihiro Kinoshita Thomson: ニューサウスウェールズ大学アジアビジネス言語学科言語研究主任。

この小論は1996年1月27日、愛媛県民文化会館で行われた日本語教育学会第五回研究発表会の発表論文に加筆、修正を加えたものである。

本稿では、日本における日本語教育の場で、プロジェクトワークの推進、自律学習の奨励などの動きとともにみられるリソースの定義の拡張に注目し、リソースを人的リソース、物的リソース、社会的リソース、情報サービス・リソースの四つの角度から検討する。また、リソースの意義を社会言語学、第二言語習得、教育学の立場から検証し、さらに、日本国内に限らず、海外における日本語教育の場での、地域社会内のリソースの活用について、オーストラリアのニューサウスウェールズ大学の例を紹介しながら、検討してみたい。

## 2. 「教材」からリソースへ

教科書に代表される「教材」は、教室活動を中心として開発されてきたといっても過言ではないだろう。教室で練習するためのモデル会話や、そのためのカセット・テープ、教室でみるビデオ、また、学習者が宿題として問題集を与えられる場合も、教室活動の準備と考えられるのではないか。教室での日本語使用のために作られ、教えるための材料であるのが「教材」であるとすれば、実社会での日本語使用のための学習に使い、実際の日本語使用にも役立ち、また、日本語使用の対象となる、つまり学ぶ材料であるのがリソースといえるかもしれない。

田中・斉藤(1993: 44-45)は、「学習に関するインターアクションの対象となるものをリソースと呼ぶ」と定義している。学習者が教師に質問をし、それに教師が答えれば、インターアクションが成立し、教師はリソースとして起動したことになる。学習者が新聞を読み、情報を得れば、新聞はリソースであるし、日本人の友達とデートして日本語で話したら、友達はリソースである。レストランで日本語で注文したら、レストランもリソースである、という考え方だ。つまり、「教材」から、従来の「教材」も含めた広義のリソースへの移行は、学習者の教室からの解放をも意味する。

日本国内では、プロジェクトワーク(バルダン他 1988)や、体験学習法(安場他 1991)などの形で「教材」以外のリソース、例えば、一般の日本人をリソースとして使う学習法の促進がみられ、実例の報告もある。倉八(1993, 1994)ではプロジェクトワークの一環として、街頭の一般日本人などにインタビューを行っている。田島(1995)では、「地域社会に開かれた教室」をめざすことで、地域社会のリソースの活用の促進を説いている。溝口(1995)では学生を日本人家庭に訪問させている。日本国内での日本語教育の場合、学習環境の中に日本語学習のリソースとなるものが豊富なため、日本語教育の場に「教材」以外のリソースを取り入れることは比較的容易だと思われる。海外での日本語教育の場では、意識的なリソースの発掘が必要となるが、海外でもオーストラリアのモナッシュ大学(尾崎・ネウストプニー 1986; 村岡 1992 など)や、ニューサウスウェールズ大学(Thomson 1995b)、シンガポール国立大学(トムソン 1991; 梅田 1993)、タイのカセサート大学(植田 1995)などで、その地域社会の中に見出せる日本語学習リ

ソースを利用したさまざまなプロジェクトの報告をみることができる。

### 3. なぜリソースなのか

リソース、そして、学習者の教室からの解放がどうして有意義なのかを社会言語学、第二言語習得、教育学の三つの面から検討してみたい。

#### 3-1. 社会言語学

ネウストプニーに代表される社会言語学に基づいた日本語教育では、言語能力、社会言語能力、社会文化能力のすべての能力を日本人との接触場面で駆使できる学習者を育てることをめざしている (Neustupny 1987 他多数)。従来の日本人同士の母国語話者場面をモデルとした教材を使い、教師と学習者から成る教室活動では、社会言語学が示唆する総括的な接触場面のための日本語学習は期待できない。教室の壁を取り払い、学習者とリソースとしての一般日本人の出入りを自由にすることで、接触場面を作りだし、学習者に言語能力、社会言語能力、社会文化能力のすべてを使わせていくという考え方である。

#### 3-2. 第二言語習得

第二言語習得の研究から、学習環境の中で社会的なインターアクションが非常に重要であることがわかってきている。目標言語の話者との社交機会の頻度と目標言語の習得の度合いの関連性も明らかにされている (Pica 1994)。インプット仮説 (Krashen 1985) は、適切なレベルでの理解可能なインプットの重要性を説き、Swain (1985) は、それに加えて理解可能なアウトプットの重要性を述べている。また、Pica 他(1989)は、理解可能なアウトプットの第二言語習得における重要性を証明している。理解可能なインプット、アウトプット共に、ある文脈の中でこそ確な理解が可能になるわけで、このことより第二言語習得には、学習に文脈を与えることが必須といえる。また、その文脈が学習者に目標言語話者との社交機会を与えるものであるほどよいだろう。教室内の限られた文脈の中だけの活動より、教室の内外で、日本語話者との交流をも含めた文脈の中の方が、学習が進むというものである。

#### 3-3. 教育学

Stern (1987) は、外国語教育のシラバスは言語能力開発、実体験、文化、そして、一般言語教育の4次元で構成しなければならないと述べている。教室内外のリソースを使って学習者にインターアクションの実体験をさせることで、この実体験の次元が満たされる。そして、この実体験は他の3次元へとつながっていく。梅田(1993)は、シンガポール人学習者をシンガポール在住日

本人家庭に訪問させるプロジェクトの結果、学習者が教室活動では体験することのできない日本文化(例えば、抹茶を飲む)に接し(文化の次元)、また、学習者が日本語力の自己評価をするよい機会になった(言語教育の次元)と報告している。教師の「不自然な」日本語に限らず、バラエティーに富んだ日本語に接するという一方で、また、文脈の中で実際使用をするということで言語能力開発の次元が入ることはいうまでもないだろう。

トムソン(1994)は、日本人と日本語でのインターアクションをすることによって日本語を学習していけるようなノウハウを学習者につけてやることの重要性を説いている。Tanaka (1993)は学習者トレーニングを組み込んだ教材の開発を提唱している。これらは、リソースの有効使用と日本語学習のノウハウを教えていこうという動きと言い換えることもできよう。

#### 4. どんないリソースがあるのか

##### 4-1. リソースの範疇

田中・斉藤(1993)によれば、リソースは「人的リソース」、「物的リソース」、「社会的リソース」の三種類に大別される。「人的リソース」は学習のリソースとなる人間で、友達や同僚の日本人、教師、学習者仲間などである。従来の「教材」は「物的リソース」に入れてよいだろう。その他、実物教材 (Realia) といわれる新聞、雑誌、広告、ラジオ、テレビ、なども含まれる。「社会的リソース」は学習者の生活するコミュニティーの中のリソースである。地域社会のネットワークを使って、例えば、大学のサークル活動を通じて学習すれば、そのサークルがリソースである(田中・斉藤 1993)。

田中・斉藤(1993)では別項として扱っていないが、本稿では「情報サービス・リソース」の項を設けたい。「情報サービス・リソース」は、とくに海外における日本関連の情報源としてのリソースで、例えば、国際交流基金シドニー日本文化センターは、日本映画上映の情報、日本文化関連の展示会の情報などを流してくれる。また、インターネットを使って日本関連の情報を得たり、交換したりすることも最近では進んでいて、これもこの範疇に入れたい。

##### 4-2. 海外の日本語学習リソース

日本国内の日本語教育では、教室を一步出ればリソースだらけという状況だが、海外の場合は、教師、学習者ともに、意識してリソースをさがし、利用していかなければならない。海外といっても、地域によってリソースの質、量は千差万別である。当地、シドニーはかなり恵まれているといってよく、日本企業の駐在員とその家族、日豪で協定のあるワーキングホリデーで滞在中の若者、永住者などの日本人コミュニティー(1万人程度といわれている)があり、日系企業、

日本人学校、日本料理店、日本食品店、ビデオショップ、などもある。それに加えて、新婚カップルに代表される日本からの海外旅行者を対象とした、日系ホテル、土産物屋、旅行会社などもある。

#### 4-2-1. シドニーの人的リソース

シドニーには先に述べたように、企業の駐在員、その家族、ワーキングホリデーの若者、永住者、旅行者など、多くの日本人が出入りしている。地域社会に住む日本人や、日本からの旅行者が人的リソースになることはもちろんだが、コミュニティーの外国人日本語話者、日本語学習者仲間も、海外においては重要なリソースである。シドニーの場合は、韓国、中国系移民が多く、戦前戦中の歴史から年配の韓国系、台湾系日本語話者もいるが、こういった方の中には学習者に協力的な方も多く、有り難いことである。また、若い世代の外国人日本語話者が、流暢な日本語を使ってツアーガイド、土産物屋の店員などをしていることもある。各国と比べてオーストラリアは、日本語学習者の全人口比が非常に高く(1%で、韓国に続いて世界第2位、嶋津 1995)、その中でも中・上級話者が多くみられ、アジアからの移民の中には日本人観光客にすっかり日本人と思われるような上級話者もいる。

上級まで達していなくても、例えば、日本語を学び始めたばかりの1年生の学生にとって、3年生の学生は重要なリソースである。これは、地域社会というより、大学の日本語学習者コミュニティーの中でのリソースといえよう。教室内でも、教室コミュニティーという考え方(Chamot 1995)をすれば、先生からだけでなく、同級生からも学べる。自分より力が劣るように見える同級生からも学ぶものがあるという態度の育成も重要である。

また、日本語が全くわからない家族や友達もリソースとしての利用が可能である。教室では恥ずかしくて、口に出して練習できない学生も、何もわからない友達を練習台にして上達したり、自分が習ったことを家で妹に教えることで、復習したり、「こんにちは、いいお天気ですね」程度の発話でも、何もわからない友達の前で日本人と話して、友達に誉められ、自信をつけたりと、さまざまである。

#### 4-2-2. シドニーの物的リソース

大学で使っている「教材」は、教科書、参考書、辞書、カセット・テープ、ビデオ・テープ等の基本的なものから始まるが、オーストラリアでは、昨今の円高、豪ドルの価値の低下により、日本からの出版物は非常に割高で手がでにくい。それに加えて、アメリカ、台湾などと比べ、当地で開発された教材が少ない。しかし、地域社会を見回せば、日豪プレスを筆頭に現地の日本語新聞、雑誌、実物教材として使えるレストランの日本語メニュー、日本人観光客用の各種パンフレット、説明書、看板などの物的リソースは豊富だ。また、SBS テレビでは、毎朝、前

の晩の NHK のニュースを流しているし、TVO(テレビ・オセアニア)という衛星放送に加入すれば、日本の娯楽番組やニュースを含めた、さまざまな番組が毎晩3~4時間楽しめる。短時間ではあるが、日本語ラジオ放送もあり、また、近々日本の FM ラジオ放送が24時間聞けるようになるらしい。日本語ビデオ専門のビデオ・ショップで借りるビデオも重要なリソースだ。

上記のような公のリソースではなくても、個人のネットワークを使って、多様な日本人の集まりやサークルのお知らせ、ニュースレター、などを手にいれることも可能だ。

#### 4-2-3. シドニーの社会的リソース

シドニーには企業の駐在員を中心とした「日本人会」、永住者を中心とした「日本人クラブ」、年配の永住者の「シニア会」、「敬老会」、働く女性の「ももの会」、日豪の交流を計る「Australia Japan Society」、その中でとくに若者のための「JAYMS (Japan Australia Young Members Sub-group)」、働く日豪若者のネットワーク「JANET」など、誰でも入会できる集まりが数多くある。他に、「広島県人会」などの、各県人会、早稲田、慶応などの各同窓会、企業を中心とした主婦の会、日本人学校の PTA、入園前の子供と母親のプレイグループなど、入会資格になんらかの制限がある集まりも多い。ニューサウスウェールズ大学にも「日本語クラブ」という学生と日本人の若者のサークルがある。

これらのネットワークは学習者が入って行きやすいものとそうではないものとあるが、いったん入ってしまえば、非常に重要なリソースとなるので、例えば、高校生の時に1年間広島県の高校に留学していた学生には、広島県人会に入るように勧めるなど、どんな小さなつながりでも、積極的に利用するように指導している。各グループはゴルフトーナメント、バザー、パーティー、ハーバー・クルーズなど、さまざまな催しを企画しているし、催しに参加することで、日本語使用の機会、日本人との交流の機会も得ることができる。上記のように、ニュースレターなどの出版物のあるグループも多く、また、Australia Japan Society のように、自前の日本語クラスを運営しているグループもある。

これらのネットワークの他にも、シドニー全域に数多い日本食のレストラン、日本人の居住地域に散在する日本食品店、日本人経営の美容室、日本人のよく泊まるホテル、観光地の土産物屋なども、社会的リソースといえよう。日豪のワーキング・ホリデー協定のおかげで、このようなリソースには日本人の若者が短期社員として雇用されている。日本人の美容師さんに髪を切ってもらえば、学習者は自分の髪を賭けて自分の日本語力のテストをすることになる。

#### 4-2-4. シドニーの情報サービス・リソース

海外では、日本関係の情報の入手を上手にすることが日本語使用の機会を増やす鍵である。上記のさまざまなサークルも、ニュースレターやお知らせを配付することから、また、地元の新

聞、雑誌も、情報サービス・リソースとっていいだろう。先に述べた国際交流基金シドニー日本文化センターの他に、ワーキング・ホリデー事務所、日本領事館などといった、さまざまな情報源がある。大学の日本語科も、ある意味では情報サービス・リソースとして機能しているといえ、地域社会からの日本関連のさまざまな問い合わせに答え、学習者からの学習に関する問い合わせに答えている。

パソコン通信を使った情報の入手も、発信地はシドニーではないが、シドニーで受信できることからシドニーにおける重要な情報源だ。WWW(ワールド・ワイド・ウェブ)を使えば、日本の新聞記事を始めとした、各種の日本語の情報を居ながらにして入手できる。

## 5. リソースの活用

上記のリソースの分類は、必ずしも境界線のはっきりしたものではなく、例えば、現地の日本語新聞のように、一つのリソースが物的リソースであると同時に情報サービス・リソースでもあったりする。また、リソースの利用も、一種類のリソースを使って学習するというより、複合的な組み合わせで行われるほうが自然だ。

例えば、あるサークルのニュースレターで、さだまさしがこの1月、シドニーに来てコンサートをする情報を得て、学習者が日本人の友達とコンサートに行けば、日本語の歌を聞き、日本的なコンサートでの日本人の行動を観察し、日本人の友達と感想を交換し合い、歌が気に入れば、日本のペンパルに手紙を書いて、CDを送ってもらい、歌を習うかも知れない。この一連の行動には情報サービス・リソース(サークルのニュースレター)、社会的リソース(サークルのネットワーク、コンサート)、物的リソース(CD)、人的リソース(日本人の友達、ペンパル、コンサートの観客)と、すべての範疇のリソースが登場している。

## 6. リソースと日本語プログラム

それでは、海外の日本語プログラムでは、どのように学習者を教室から解放し、地域社会に豊富なリソースを活用した日本語教育を展開していけるだろうか。ニューサウスウェールズ大学の例を紹介しながら検討したい。

### 6-1. シラバスの中のリソース活用

一つの方法は、シラバスの中に地域社会のリソースを活用するような企画を組み込むことである。シンガポール国立大学では、日本人観光客にお願いしての街頭インタビュー(トムソン1991)、駐在員の日本人家庭への訪問(梅田1993)などを、タイのカセサート大学では、タイ在

住中の日本人家庭へのホームステイ(植田 1995)を、オーストラリアのモナッシュ大学ではビジター・セッションと称して日本人ゲストをキャンパスに招いて(村岡 1992)、それぞれ、シラバスに組み込んでいる。ネウストプニー(1991)には、実際使用のアクティビティーとして海外のリソースの活用例が挙げられている。ニューサウスウェールズ大学でもさまざまな形で地域のリソースをシラバスに組み込んでいるが、いくつか紹介したい。

#### 6-1-1. ゲスト・スピーカー

ニューサウスウェールズ大学では、英国式大学の伝統で、各課目全体講義が週1時間あるが、学習項目に適した日本人のゲスト・スピーカーをお願いして、講義で話してもらっている。教室の中に人的リソースを取り込む形だ。日本の女性をトピックとした3年生の講義では企業の駐在員の妻として来豪している日本人主婦に来て話してもらった。日本の大学というテーマでは日本人留学生に来てもらった。ビジネス日本語のクラスには日本から研究で滞在していた経済学の客員教授に話してもらったし、観光業日本語のクラスには日系ホテルのホテル・マンに来てもらった。

ゲスト・スピーカーを迎えるに当たって、学習者は質問を準備し、お客様を迎えるに相応しい立ち居振舞、日本語使用を習う。その体験はそれに続く評価に反映される。

#### 6-1-2. ビジター・セッション

モナッシュ大学同様ニューサウスウェールズ大学でもさまざまなビジター・セッションを行っている。20名程度の学習者グループの授業に4~5名の日本人を招喚し、学習項目のトピックでディスカッションをしてもらう。トピックによって、ワーキング・ホリデーの若者のグループ、家庭の主婦のグループ、働く女性のグループ、ビジネスマンのグループなど、違ったタイプの日本人のグループをお願いしている。小グループのディスカッションを通じて、日本語教師とは違う多様な日本人と接し、日本語教師だけからでは学べないことを学んで欲しいと願っている。お客様を迎えるために言語、社会言語、社会文化面の準備を周到に行うことはもちろんである。学習者の日本語使用はセッション中だけに限られず、お知らせのメモ、確認の電話、校門、駐車場からの案内、見送り、お礼の手紙と、広範囲に互る。

#### 6-1-3. 家庭訪問

中・上級のクラスでは、学生をグループで日本人家庭に送っている。短時間の訪問だが、そのための準備は大変である。訪問中の話題になりそうなトピックに関する予備知識をつけ、言葉の練習をし、日本人家庭訪問時のマナーのビデオをみて練習し、手みやげをそろえ、訪問前の連絡を日本語でとる。訪問の一部をビデオに撮り、その後の授業でみて反省し、補充練習を行う。訪

間後も家庭との連絡を学生が日本語でとることはもちろんである。

#### 6-1-4. UNSW 通信

上級クラスでは、UNSW 通信という日本語のニュースレターを年1回発行している。ニューサウスウェールズ大学のことをシドニー在住の日本人に知ってもらおうという趣旨で、学習者は、大学内の日本人の先生や留学生にインタビューし、文献を調べ、記事を書き、ワープロで入力し、編集し、ニュースレターを刊行する。ニュースレターはシドニー在住の日本人にさまざまなルートで配付され、毎年好評を得ている。

この活動では、学習者が地域社会の日本人と接しながら記事を書くことだけではなく、シドニーの日本人社会が現実の読者として存在することに意義がある。

#### 6-1-5. パソコン通信と WWW

同じく上級のクラスでは、パソコン通信を使って日本の大学生と交信している (Iida and Hashimoto 1995)。学習中のトピックについての質問を直接日本人大学生にぶつけ、返事もらい、それをもとにしてディスカッションを行うというものだ。学習中のトピックについては WWW を使ったの情報収集も行っている。

### 6-2. シラバスの中のリソース活用の弱点

上記のようにさまざまな形でシラバスの中にリソースを組み込めば、学習者に実際のインターアクションの機会を与えることができ、優れた学習効果が期待されるが、このような形ではインターアクションは教師がお膳立てしたものに過ぎない。学習者は教師が呼んでくれたゲストと話し、教師がさがしてくれた日本人家庭にお邪魔するわけで、実際のインターアクションのノウハウはつくかもしれないが、自主的にリソースを開発し、自律的に活用し、学習していくところまで行っていない。春原(1992)のいうところの「ネットワーキング・ストラテジー」の開発にはならないわけだ。

また、現実問題として、比較的小人数の上級クラスでは教師のお膳立てが容易でも、初級、中級の多人数所帯では、教師がリソース調達に全責任を負うのは大変なことである。学習者が100名の3年生では、20名グループの5クラスに4~5名ずつボランティアの日本人をお願いするには、何ヵ月も前からの周到な準備が必要となる。

初、中級学習者には教師側のなんらかのお膳立てが必要ではあるが、学習者が自分の学習に責任をもっていくような形でのリソース活用を促進するコース運営が必要となってくる。

### 6-3. 全体シラバス外のリソース活用

学習者が自主的に日本人の協力者をさがし、地域社会内のさまざまなリソースを活用して自律的な学習を体験するように、3年生のコースでは、全員が同様の学習をする全体シラバス(シラバス内のリソース活用を含む、コース評価の80%)と、学習者が自分で選択し、運営していくプロジェクト・個別シラバス(20%)の組み合わせでコースを作っている。

プロジェクトには四つの選択肢がある。学生は、口頭技術に重点をおいた Oral Skills Clinic、漢字力に重点をおいた Kanji Power Building、将来日本語教師をめざす学生のための Junior Teacher Internship、上記のどれにも当てはまらない学生のための Learning Contract (Thomson 1995a) の中から自分に適したプロジェクトを一つ選び、それぞれのプロジェクトの大枠に添って、日本人協力者と一緒にグループ活動をしていく。

プロジェクト自体は、かなり大まかなガイドライン以外は学生の自主性に任せられ、学生はグループで日本人協力者をさがし、1学期のうち12週間、最低週1回1時間その日本人と会って、プロジェクトを進めていく。学習に必要なリソースも自主的に発掘し、教師は、カウンセラー、アドバイザー的な役目を担う。学習者は、グループで学期の初めに学習計画書と、終わりに報告書を提出する。

このプロジェクトの利点は、プロジェクト自体より、むしろ学習者が日本人協力者との定期的な交流を通じて、シドニー日本人コミュニティーのリソースに紹介され、ネットワーク作り(ネウストプニー 1995)をしていることにある。報告書を読むと、学習者は日本人協力者と一緒にプロジェクトのガイドラインで指示されていること以外のさまざまな活動をしている。日本食を食べに行ったり、うちに呼ばれて日本食の作り方を習ったり、そのお返しに韓国料理を作ってあげたり(韓国人学習者)、カラオケに行ったり、日本人協力者と一緒に日豪親善サークルのメンバーになったり、ビデオを借りてみたりしている。こういった活動を通じて、シドニーの日本語リソースを知り、活用し、自分の日本語学習ネットワークを作り、プロジェクトが終わり、学期末試験が終わっても、活用し続けることができれば、プロジェクトは学習者の自律性の発育に一役かったことになる。

学習者がシドニー日本語リソースに接すると同時に、日本人協力者も学習者の属するシドニーのコミュニティーに紹介されることになる。上記のように韓国人学習者グループに協力した日本人は韓国料理の作り方を習い、中国人グループに協力した日本人はシドニー中のおいしいヤムチャの店を発見する。アングロ・サクソン系の学習者からはオーストラリアの有名なミートパイの店でカップチーノとミートパイを御馳走してもらい、オーストラリアのスラング(俗語)も教えてもらう、といった具合で、プロジェクトが相互交流を作りだしているわけだ。

## 7. おわりに

本稿では、広義の日本語学習リソースの定義、範疇、実際例を検討し、その海外での有意義な活用をニューサウスウェールズ大学を例にとりて考察した。古川(1993: 12)は「日本社会全体が外国人学習者のためのリソースセンターとなり、学習支援システムを形成する……」と述べているが、リソースセンターとなるのは日本社会全体だけにとどまってはならない。世界に点在する日本人コミュニティが、そこにいる一人一人の日本人が、また、一軒の日本料理店が日本語学習のリソースであることを教師が自覚し、学習者に指導していかなければならない。日本語教師は「外国人学習者と日本人を結び合わせ、その間に相互交流を作りだし、それを通して外国人学習者と共に教師自身を含め各自が協働して学習していくことの実現を追究する」(岡崎・西川 1993: 32)と同時に、学習者に自ら日本人との相互交流を作りだしていける自律学習のノウハウをつけてやるのが重要だ。

ニューサウスウェールズ大学で行っているような日本語教育の運営には、日本語教育のその現地における「動的ネットワーク」(林・尾崎 1993)を始動させてやろうという教師チームの一貫した決意とエネルギーが必要である。「教材」からリソースへの移行は日本語教師の役割の再考と言い換えることができるのかもしれない。

### 謝 辞

初めに、周り中の日本人、日本関係者の参加を呼びかけて、忙しく動き回るニューサウスウェールズ大学の日本語学習者と教師陣の熱意に敬意を表したい。続いて、ニューサウスウェールズ大学の日本語教育にさまざまな形で協力してくださっているシドニー周辺の皆様方に感謝したい。最後に、シドニー周辺のリソースを活用した日本語教育の開発はニューサウスウェールズ大学商学部教育開発助成金によるところが大きいことを述べ、開発プロジェクトチームの皆さんにもお礼を述べたい。

### 参 考 文 献

- 植田栄子(1995)「海外日本人家庭で行うホームステイプログラムの有効性——タイにおける日本語学習者の場合」、『世界の日本語教育、日本語教育事情報告編』2号, 213-232.
- 梅田千砂子(1993)「コミュニティを利用した日本語教育」、『日本語教育の方法と実践』, 大坪一夫・梅田千砂子編, Department of Japanese Studies, National University of Singapore.
- 尾崎明人・J. V. ネウストプニー(1986)「インターアクションのための日本語教育——イマージョンプログラムの試み」、『日本語教育』59号, 126-143.
- 岡崎敏雄・西川寿美(1993)「学習者とのやりとりを通じた教師の成長」、『日本語学』12号, 31-41.
- 倉八順子(1993)「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識・態度に及ぼす効果(1)」、『日

- 本語教育』80号, 49-61.
- 倉八順子(1994)「プロジェクトワークが学習成果に及ぼす効果と学習者の適性との関連」, 『日本語教育』83号, 136-147.
- 嶋津 拓(1995)『オーストラリアの日本語教育について』, 国際交流基金シドニー日本語センター.
- 田島弘司(1995)「地域社会における日本語教育の進展——その必要性と今後の課題」, 『95年度日本語教育学会春季大会発表集』.
- 田中 望・斉藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際』, 大修館書店.
- 田中 望(1993)「教師の役割の新たな広がり」, 『日本語学』12号, 7-12.
- トムソン木下千尋(1991)「シンガポール人学生用日本語教科書における文化教材開発の試み」, 第2回シンガポール国立大学日本研究学会発表論文.
- (1994)「初級日本語教科書と「聞き返し」のストラテジー」, 『世界の日本語教育』4号, 31-44.
- ネウストプニー J. V. (1995)「日本語教育のネットワーク—ランゲージ・マネージメントの観点から—」, 『ひろがる日本語教育 ネットワーク——最新事例集』, 日本語教育学会.
- (1991)「新しい日本語教育のために」, 『世界の日本語教育』1号, 1-14.
- 春原憲一郎(1992)「ネットワーキング・ストラテジー——交流の戦略に関する基礎研究」, 『日本語学』11号, 17-26.
- 林さと子・尾崎明人(1993)「動的ネットワークと教師の成長」, 『日本語学』12号, 53-60.
- バルダン田中幸子・猪崎保子・工藤節子(1988)『プロジェクトワーク』, 凡人社.
- 古川ちかし(1993)「日本語教師の専門性の再検討」, 『日本語学』12号, 4-6.
- 溝口博幸(1995)「インターアクション体験を通じた日本語・日本事情教育——「日本人家庭訪問」の場合」, 『日本語教育』87号, 114-125.
- 村岡英裕(1992)「実際使用場面での学習者のインターアクション能力について: 「ビジターセッション」場面の分析」, 『世界の日本語教育』2号, 115-128.
- 安場 淳・池上摩希子・佐藤恵美子(1991)『体験学習法の試み』, 凡人社.
- Chamot, A. U. 1995. Creating a community of thinkers in the ESL/EFL classroom. Plenary speech given at TESOL '95 Convention, Long Beach, California; its report appeared in *Learning Learning* 2(2): 21-22.
- Iida, S. and Y. Hashimoto. 1995. Internet applications for teaching Japanese language at advanced levels. Paper presented at Applied Linguistics Association of Australia 20th Annual Conference, September, Canberra.
- Krashen, S. 1985. *The input hypothesis*. London: Longman.
- Neustupny, J. V. 1987. *Communicating with the Japanese*. Tokyo: The Japan Times.
- Pica, T. 1994. The language learner's environment as a resource for linguistic input? A review of theory and research. *I.T.L. Review of Applied Linguistics* 105-106: 69-115.
- Pica, T., L. Holliday, N. Lewis, and L. Morgenthaler. 1989. Comprehensible output as an outcome of linguistic demands on the learner. *Studies in Second Language Acquisition* 11: 63-90.
- Stern, H. H. 1987. Directions in syllabus design. In *Language syllabuses: State of the art*. ed. M. L. Tickoo, Anthology Series 18: 19-32, SEAMEO Regional Language Centre, Singapore.
- Swain, M. 1985. Communicative competence: some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In *Input in second language acquisition*, ed. S. Gass and C. Madden. Rowley, Mass: Newbury House Publishers, Inc.
- Tanaka, N. 1993. Course design for autonomous learning. In *Japanese language teaching in the nineties*, ed. S. Kaiser. Japan Library: England, U.K.
- Thomson, C. K. 1995a. A learner-centred foreign language curriculum for a large diverse group of students? Yes, it is possible. In *The hard work-entertainment continuum: Teach-*

*ing Asian languages in Australia*, ed. A. Kirkpatrick et al. Applied Linguistics Association of Australia Series S, No. 12: 119-30.

Thomson, C. K. 1995b. Where are the learning resources? Locating and integrating community resources into our teaching. Paper presented at UNSW Education, 95 Conference, November 1995, Sydney.